

『記憶の箱』

作者 浅羽一

少し重たい木の扉を押すと、古びたビルの灰色から一転、穏やかな光が出迎えてくれて、A氏は不思議な安らかさと仄かな高揚感を同時に抱いた。寒色のタイルを敷き詰められた床と、暖色に彩られた壁。冬でも素肌で触れたいと感じられる木のカウンター・テーブルの向こうには、色取り取りの酒瓶がぴかぴかと輝いていて、それはまるで高級宝飾店を彷彿させた。

「少し遅いけど、大丈夫かな」。A氏の問いに、カウンターの中にいた男性バーテンダーは柔らかな表情で「はい、いらっしゃいませ」と応えた。彼がこの店に来るのは決まって人気のない深夜だったが、バーテンダーはいつでも変わらず彼を迎えてくれた。カウンターの奥の端に位置する席が、いつしか彼の定位置になっていた。

席に着き、商売道具の入ったカバンを足下に置くと、真っ白なおしぼりがそつと差し出された。

「今日はどうぞされますか」

おしぼりで顔を拭くA氏に、バーテンダーは落ち着きのある声でそう尋ねてきた。

A氏はやはりいつもと同じく「それじゃあ、ギムレットを。ジンとライムを一对一で」。

「かしこまりました」と、バーテンダーは流れるように動き始めた。グラスやシェーカーだけでなく、生のライムや細長いジンの酒瓶までもが、すでに用意されていたみたいに彼の周囲へ配置されていた。

A氏は、酒を注文することが好きだった。そしてそれ以上に、自らの注文を受けたバーテンダーの動きを、それも特に手の動きを眺めることが好きだった。だからこそ、彼は決して最初の一杯を尋ねられた時に「いつもの」なんて答え方はしなかった。バーテンダーもまた、A氏の毎度の注文にも初めてのような丁寧さで応えてくれて、それはA氏にとって、決して大げさに態度に出したりしないものの、喜ばしい事だった。彼はある意味で、酒に酔うよりも、まずはバーの雰囲気こそ酔いたいのだ。

銀色のシェーカーが光の残像を描くたびに、液体の中でぶつかり合う氷の音が心地よく響いた。力強く腕を振っているのに、バーテンダーの体は全くと言っていいほど揺れておらず、その姿は一流の楽器奏者を思わせた。

「お待ちせ致しました、ギムレットでございます」

爪の先まで綺麗な指がコースターを置いて、そこに三角錐の先から細い足の伸びたカクテル・グラスが載せられた。グラスを満たすうっすらと白い液体の表面には、氷の細片が浮かんできらきらと光を反射していた。

「いただきます」と、A氏はそれを静かに持ち上げ、ガラスの縁に唇を触れさせた。

口に含んだ液体は、驚くほどに冷たくて、刺激的だった。だが、それは喉を滑り落ちた途端に、今度は燃えるような熱さへと変わった。そうして、それらが全て流れた後、喉から鼻の奥へと立ち上ったのは、さらりと爽やかな柑橘系の香りと、ふわりと広がる花のような香りだった。

A氏は三口で飲み干し、グラスを置いた。すると、空になったグラスの隣へ、両手の平に丁度載りそうな薄い木箱が差し出された。「お預かりしているものでございます」。

A氏は静かに木箱の蓋を持ち上げた。酒のものとは種類の異なる、独特の甘さと鋭さを秘めた香りが鼻腔へと漂ってきた。箱の中には、細い葉巻が並べられていた。

A氏は葉巻を一本、取り出して、しかしすぐに吸うことなく、両端を左右の手でつまむ

形で鼻の下へと当てた。それから目を閉じて、ゆっくりと深呼吸。バーテンダーは曇り一つ無い銀色の灰皿と小さなマッチ箱を置いたきり、彼に対して何もせず、声も掛けなかった。

「この間は、ずいぶんと愚痴を聞いて貰ったね」

と、ややあってA氏は葉巻を持ち直すと、一方の先端を箱に付属のナイフで切って吸い口を作りながら言った、あたかも昨夜の酒の失態を思い出して恥ずかしがっている口調で。バーテンダーはそんなA氏に対して、微笑を浮かべて「バーテンダーは、聞くことが何よりの仕事ですから」。

「まあ、俺達の仕事も、ある意味じゃ『聞くこと』だけだ」

A氏は皮肉じみた苦笑を浮かべると、マッチを擦って葉巻の先に火を付けた。そして肺を使わず唇の動きだけで呼吸するように、口から紫煙を漂わせる。

「でも人によっちゃ、聞くんじゃなくて、嗅ぐんだろって言う奴もいる」

「嗅ぐ、ですか」

「確かにその通りさ。聞いても答えてくれない真相を求めて、当人らの周囲をうろついて嗅ぎ回るんだから」

そう言うのとA氏は葉巻を灰皿に載せて、「ただし、俺達みたいな人間の欲しがる真実なんて、所詮は上っ面だけのものだけだね」。

「大変なお仕事ですね、本当に」

「タレントやアイドルをつけ回して、ゴシップの種が落ちてないかどうか探すんだ。大変だよ、実際。本人達には煙たがられるし、そのくせ都合の良い時ばかり利用しようとしやがるし。ま、それはこつちも同じなんだけど」

「……………」

「雑誌を読んでも奴らだってそうだ。俺達みたいな人間をハイエナみたく言うくせに、そんな連中が見つけてきたり、いつそでっち上げたりした記事に群がるんだから。いや、読者だけじゃない、政治記者や新聞記者の中にだってそんな奴はいる。真実を追究するジャーナリズムを支えてるのは、そうやって雑誌を売って稼いだ金なのに」

「でも、でっち上げたり、しないんでしょう？」

不意の問いかけは、愚痴と言う着ぐるみをかぶったA氏の自嘲をびたりと止めさせた。バーテンダーの眼差しは、答を待っている風には見えなかった。

果たして、A氏は葉巻を一服し、「駄目だな、また愚痴ってる」と照れ臭そうに呟いた。

「巨大企業の合併話を追ってる記者がいれば、タレントやアイドルがくつつくかどうかにかに血眼になってる奴もいる。まあ、それが世の中だな」。

「よろしければ、何か飲まれますか」

「そうだな…」

A氏は僅かに考え、やがて「ウイスキーを、今日はトウワイス・アップで」と言った。「やっぱり、葉巻にはウイスキーだろ」。

「銘柄の指定はございますか」

「お任せするよ」

「かしこまりました」

バーテンダーがカクテル・グラスを片付け、再び、流れるように動き出す。背の低いグ

ラスにスコッチ・ウイスキーのシングル・モルトが注がれ、そこへさらに同量の水が。美しい琥珀色の中で、ほんの一瞬、比重の異なる液体が混じり合う際に生じるもやが眺められた。

「俺が言うのも何だけど、誰にだって知られたくない真実の一つや二つ、あるもんだよ」
バーテンダーの動きを目で追いながら、A氏が紫煙と共に言葉を吐いた。「問題は、それを隠しておける場所が、今の世の中じゃ酷く限られているって話だよ」。

「どうぞ、お待たせ致しました」。A氏の前に、すつとグラスが差し出された。彼は口の中を空にすると、それを一口飲んで、また葉巻をふかした。そして一言、「…ああ、美味い」。

バーテンダーは嬉しそうな、誇らしそうな表情で、彼の声を聞いていた。

「本当に、此処は良い店だよ」

「ありがとうございます」

「だから、俺も預けられる」

「記憶の箱、ですね」

「洒落た言い回しだろ。ずいぶんと昔、今とは違う職場にいた頃に先輩記者から教わったんだ」

「ええ、とても良い先輩だったんですよ。とても優秀な方だったと」

「俺はとつくに落ちぶれちまったけど、何でだろうな、あの人の話は、今でもたまに思い出す。ジャーナリストは、ひたすら聞いて、聞くことが仕事なんだ。そして絶対に、聞いた話を漏らさない。聞いた話を表に出す時は、常に書く時だけだ」

「でも、ジャーナリストだって人間」

「そうだ。例えば嫌な上司とぶつかって酒を飲んだ時、思わず気が緩んで、余計な事を喋りそうになったりする。綺麗な女を口説く時に、ついつい格好付けて仕事で成功した時の話をしそうになったりする」

「だからこそ、記憶はきちんと整理して、しまっておくんですね」

「箱に、鍵を掛けて、な。ちよつとした油断で失敗しないように、そしてまた肝心な時にいつでも引き出せるように、自分の心とは別の場所に、記憶をしまった箱を置いておくんだ」

「素敵なお話だと思います」

「と言っても、これはあくまでも喩え話で、実際に箱を用意する必要なんてないんだけどさ。けどま、俺はあの人ほどに出来ちゃいないから、分かりやすい小道具が必要なんだ」

「だとすれば、シガー・ケースほど最適なものは無いかも知れませんか。かつてはスパイなどの秘密文書の受け渡しに使われたこともあるそうですから」

「中に詰まってるのは、ほとんど愚痴ばかりだけどな」

「それもまた、その人の真実でしょう」

「ま、酒が好きで、煙草が好きで、家に帰ってもほとんど家族に無視されているような男の箱なんだ、そんなもんだよ」

そしてA氏は軽く肩をすくめると、美味そうにウイスキーを飲んでから、「この世で一番に本音を言えない場所ってのはな、自分の家なんだぜ。全く、ふざけた話だ」と愉快げに笑った。



全く嫌な一日だったと、A氏は夜の街を歩きながら思っていた。今日の彼の仕事は、人気急上昇中の若手俳優と新人グラビア・アイドルの密会現場をスクープした……という体の、実の所は俳優もアイドルも記者も全員がグルになっている捏造写真の撮影だった。目的は単純だ、俳優にとつてはもうじき公開される映画の宣伝の為の話題作り、アイドルにとつては売名行為、そして記者にとつてはただの仕事。

彼らの行き先も、会う時間も、いつそスクープ写真の構図までそれぞれの事務所と事前打ち合わせていたのだ、撮影そのものは何の問題もなく、それどころか普段と比べれば遙かにあっさりと終わり、A氏はしばらくぶりに日付が変わるよりもずいぶん早く仕事から解放されていた。だけど、それなのに彼の中では後味の悪さばかりが渦巻いていて、昼から何も食べていなくて空腹のはずなのに、彼は胸焼けを起こしているみたいひたすら不快そうだった。今日はやけに肩へ食い込んでくる、カメラなどを収めたバッグの紐は、とにかく鬱陶しいものだった。

気付けば、A氏はいつものビルの前へやって来ていた。平日ど真ん中の、午後十一時過ぎ。ビルはとても静かだった。

A氏は僅かに躊躇った。だが、結局は扉を押した。それはあたかも、寄りかかれる所を求めているようだった。

バーの店内には先客がいた。と言っても、まだ年若そうな男女のカップルが一組だけ。二人はカウンターの一番奥、A氏のいつも座る辺りに並んでいた。

A氏は僅かに残念さを抱いたものの、すぐに仕方ないと気を取り直し、バーテンダーに「やあ」と言った。バーテンダーはA氏が珍しい時間に登場したせい、少しだけ驚いていた風だったものの、彼を迎えるその声はいつもと何ら変わりなかった。

「悪いね、こんな時間にいきなり来て……って、普通はもっと遅い時に言う台詞か」

「いえいえ、いつでも大歓迎でございます。ただ、申し訳ございません、本日のお席ですが」

「ああ、何処でも良いよ。いつもと違う上に、予約もしてないんだ」

「でしたら、入り口の近くで恐縮ですが、こちらでもよろしいでしょうか。あちらのお客様が煙を苦手とされていらっしやいます」

バーテンダーが勧めてきた席は、言葉通りカウンターの一番手前から二つ目の席だった。A氏が席に着いてバッグを下ろすと、「今日はもうお仕事は終わりですか」とバーテンダーがおしぼりを差し出しながら言った。彼は「たまにはこんな日もあるさ」とそれを受け取り、苦笑を浮かべた顔を拭いた。

「今日はどうぞさめますか」

「それじゃあ、ギムレットを。ジンとライムを一对一で」

「かしこまりました」

普段通りのやりとりを経て、やがて完成される一杯のカクテル。バーの扉が街との境界

線だとすれば、それはさながら彼にとって己自身を切り替える為の心のスイッチだった。そしてその場に相応しい情態になった彼の前に、見慣れた箱がそつと置かれる。

内向きの意識で初めて開けられる箱の中からは安らぎが香り、同時に、その漂う範囲が本当に私的なものへ変わる。カウンターの端まで数メートル。カップルの会話が単なる音としてしか伝わってこないように、葉巻の香りもきつとそこまでは届いていない。

ゆらゆらと立ち上る紫煙を眺めながら、続けて注文したウイスキーのストレートを一口。決して途中で妥協することなく丹念に熟成されたスコットランド産の琥珀色は、その枯れた風味で葉巻の甘さを支えてくれた。

「今じゃもうそんなことは考えたりしないけど、この仕事に移ったばかりの頃は、思っただもんさ。自分は一体、何処へ、何の為に向かおうとしているんだらうってな」

「答は、出たんですか」

「さあ。そんなものはその都度が変わっていた気がするし、逆に言えば、ちゃんとした正解なんざ未だに見つけられてないのかも知れない。けど、自分を納得させることには慣れたよ。器用になったんだらうな」

A氏は静かに笑っていた。「この箱を開けると、思い出すよ。未熟なくせに、青臭い理想論やジャーナリズムなんてものを熟知り顔で語っていた頃を。全く、あんまりにも情けなくって、顔が赤くなつちまう」。

「だけど、懐かしい」
「…そうだな」

バーテンダーの言葉に、A氏は素直に、とても素直に頷いた。「あの頃の俺が、今の姿を見たら、きつと顔を赤くするだらうな」。

「夢はそれを見ることよりも、保ち続けることの方が難しい。あまり有名ではありませんが、私の好きな小説家の言葉です」

「まさしく、その通りだ」。A氏は愉快そうに同意し、それから「けど、大人になるってことは、別に悪じゃないさ」。

「偉そうに言わないでよ」

と、突然に女の怒声が店内に響き渡り、A氏は自身が怒鳴られたのだと錯覚して思わず体ごとそちらへ振り向いた。

しかし、当然ながら見知らぬ客の喧嘩にA氏が関わっているはずもなく。およそカウンターの反対側で、一人立ち上がった女が連れの男を睨み付け「どうして周りの都合にばかり振り回されないといけないのよ。これって、私達の問題でしょ」。

対して、男は慌てた様子で「おい、落ち着けて」などと彼女をなだめようとしているものの、効果はあまり出ていなかった。離れていても分かるほど二人共に仕立ての良さそうな身なりをしていたが、やっていることは何処にでもありそうな痴話喧嘩らしかった。

「本当にもううんざりよ。そんなに親が恐いんなら、お嫁さんもおじさんに探して貰うのね」

「あのな、そう言う話じゃ無いことくらい、お前だって分かってるだろ。これはもう俺達だけの問題じゃ無くなってるんだよ」

「私が許せないのは、あなたまでが、これを私達のこととして一番に考えてないってことなのよ」。男の反論が駄目押しとなったのか、それとも仲裁に入ろうとしたバーテン

ダーの気配を察知したのか、女はそれこそ周囲の目も気にせず大声を上げると、バッグを掴んで歩き出した。あつという間の出来事で呆然としているA氏の前を、彼女はまだ言い足りないさそうな表情のまま過ぎていった。

「すいません、お騒がせして。あの、お会計は此処に置いておきますから」
すると男もまた、そう言うやいなや、財布から万札を数枚取り出してカウンターに置き、立ち上がった。気まずそうに会釈をしてA氏の前を駆けていくその姿は、おそらく将来、彼女の尻に敷かれるだろうと予見させた。

「：失礼致しました」
ややあつて沈黙を破ったのは、バーテンダーだった。

A氏はそれに苦笑で応えた。「今のはバーテンダーの責任じゃないだろ」。

「いえ、お客様の様子を見過ぎしてしまったのは私の落ち度ですから」

「真面目だね。しかし何にせよ、客の少ないバーで喧嘩なんかするもんじゃないな。どれだけ離れているって言っても、所詮はカウンターの端と端。普通の会話ならともかく、口論なんかしたら他の客に全部筒抜けになっちゃう」

「本当に、申し訳ございません。お詫びと言っては失礼ですが、次の一杯は店からのサービスとさせて頂きます」

「そいつは嬉しいね。それじゃ、ロックで頼むよ」

おどけた口調で喜ぶA氏に対して、バーテンダーは「かしこまりました」と年代物のシングル・モルトを棚から下ろし、氷を入れたグラスに注いだ。

A氏はそれを眺めながら、あたかもありふれた世間話でもする風に「さっきの二人って、良く来るの」。

「いえ。あまり来られません」

「なら、どんな人物かって、そんなに知らないわけだ」

「はい」と、答えると同時にバーテンダーがグラスを差し出した。そしてA氏が新しいグラスに手を伸ばすと、彼はお辞儀を一つしてカウンターの端へ移動し、静かに二人の残していったグラスなどを片付け始めた。

だが、葉巻の煙草を吹かし、ウイスキーを一口飲んだA氏は、そんな彼の無言の願いに敢えて気付いていない振りをして、声だけで彼を追いかけた。「もし良かったら、さっきの二人が何者か、教えて上げようか」。

バーテンダーの回答は早かった、「いいえ」と。

「どうして。興味無い？」

「お客様から話されない限り、バーテンダーはその方のプライベートに立ち入ってはなりませんので」

「俺達の仕事とはまるで反対だな。いや、嫌味じゃなくて。報道記者も芸能記者も、そう言う意味じゃ同じ穴の貉さ」

皮肉なのか、それとも自嘲なのか、曖昧な笑みを隠そうとするように煙を吐き出したA氏は、やがてそれが晴れた頃、一転して独り言じみた口調で「最近、話題になってる例の合併話あるだろ。家電業界で一、二を争う大企業同士の合併が、果たして実現するのか、それとも単なる噂話で終わるのか。報道関係だけじゃない、三流雑誌の記者ですら真実が知りたくて些細な情報にも血眼になってる」。

バーテンダーは、何も応えない。A氏にも返事を求めている雰囲気はなかった。それはあくまでもA氏の独り言。二人の態度は一貫していた。

「もしも、仮の話だけどき、二つの会社の御曹司と御令嬢が密かに付き合っていて、しかも結婚、なんてことになったら、会社の合併話もいよいよ真実味を増してくるよな」
「……………」

「ジャーナリズムとか、報道の自由とか、どれだけ大義名分を掲げた所で、所詮、秘密を暴くって点ではどいつもこいつも一緒なんだよ」

そこまで言うと、A氏は目の前にある箱の表面を人差し指の先でこつこつと叩き、「箱の中には、秘密が一杯さ」。



正式に企業合併が公表された日の二日後。A氏はカップルの喧嘩を目撃した時以来、しばらくぶりに店を訪れていた。

「二ヶ月近くもこの店に来てなかったせいで、もう色々と限界だったよ」

「お仕事がお忙しかったんですか」

「良くある話さ。俳優と不倫相手の女優が海外で密会してるって噂が入ってきて、その裏付け取材であちこち飛び回ったり、実際に記事にする為に色々と根回ししたり」

「それは、お疲れ様でした」

「おかげで久々にスクープを上げられたけどね」。他に客もいないせいかちよつとばかり嬉しそうに言いながら、A氏は眼前に置かれた葉巻の箱を開ける。「…ああ。これだよ、これ」と、彼の口から幸せそうな呟きが漏れた。

「そう言えば」

と、記憶の蓋を持ち上げられたみたいなのに、A氏がいきなりこう言った。「例の合併話、決まったね」。

「はい、そのようですね」

「これでちよつとは景気も良くなるとありがたいんだけどね。最近、うちの雑誌も売り上げが伸び悩んでいて」

「ニュースではかなりの経済効果だと報道していましたが」

「そうなることを期待するよ。そうそう、所で、こないだの二人はあれから来た？」

「いえ、あれきりお見えになっていません」

「そっか。ま、色々あるんだろうさ」

A氏の言葉に、バーテンダーは僅かに考えた風な沈黙を挟んでから、「私のような町場のバーで手一杯の人間に、大会社の下で生きる方々の苦労など分かりませんが。それでも、頭では覚悟していても、心で葛藤してしまう時が、あるのかも知れませんか」。

するとA氏は「確かに、俺にもそんな気持ちは分からんな」と笑ってから、急に真面目な顔になって「けど、そんな小難しい話はともかく、あの二人なら上手くいくさ」。

「上手くいきますか」

微笑みながら問うたバーテンダーに、A氏は自信満々に頷いて見せた。「恋愛がらみで男と喧嘩して飛び出した女には二種類しかいない。本心では男に追って来て欲しい女と、本気で男の顔も見たくないって女だ。そしてあの彼女は、おそらく前者だった」。

「なるほど」

「しかも、男だってちゃんとそれを追った。どうせ少しして落ち着いたら、きつと抱き合っただけの一つでもしていただろうさ。喧嘩の後のセックスは良いって言うしな。要するに、あれも一種のプレイなんだよ、日頃の鬱憤の甲斐性を兼ねた」

あまりと言えば乱暴なまじめに、いつしか苦笑いのバーテンダーに対して、A氏は呆れ半分皮肉半分という感じで、「芸能界なんて、本音と建前のるつぼさ。スキャンダルの取材に対して、嫌そうな顔をしながら、心の底では人々の話題になって喜んでる奴も多いし、明るい笑顔を振りまいていながらも、精神的にぼろぼろの奴だっている」。

「……………」

「別に、カウンセラーを気取るつもりはないけどね。職業病なのかどうなのか、これでも女の建前を見抜く力は、それなりにあると思ってるんだ。ま、だからこそ、プライベートじゃなかなか女と上手く話せないだけだよ。だって、大抵の場合、男の願望と女の本音ってぶつかるもんだろ。勿論、その逆もね」

「奥様のお話ですか」

「ただの一般論だよ」

A氏は軽く鼻を鳴らして、ウイスキーの水割りで満たされたグラスを傾けた。途切れた会話を埋めるように、氷の鳴る音が小気味よく響いた。

と、唐突にバーテンダーが「ありがとうございます」。

それはA氏にとって思いがけない言葉だったが、バーテンダーが続けて「いつもご来店頂いておりますから」と言うと、ようやく彼も理解したのか、ゆるゆるとグラスを振って、「なら、こっちこそ感謝しなきゃな。だって、この店には夢を叶えて貰ってるんだから」と笑った。

「夢、ですか」

「俺が昔、憧れてた大人って、どんなのか分かる？」

「さあ、どんな大人なんでしょう」

自然な仕草で首を傾げたバーテンダーに、A氏は僅かに照れ臭そうに、だけど実は案外楽しんでいそうな口調で語り出した。

「映画で見た場面なだけだよ。こうやって、バーのカウンターに座って、一人静かにカクテルを頼み、或いはウイスキーを傾けながら氷をカランと鳴らす。そう言う大人になりたかったんだよ。だからこの店で酒を飲んでる時の俺は、いつも心の中じゃ、タレントやアイドルのケツの匂いを嗅ぎ回っているハイエナじゃなくて、自分自身がお洒落な俳優の気分なのさ。誰にも言っちゃ駄目だぜ」

果たして、バーテンダーは神妙な表情で「勿論です」。

するとA氏は心から満足そうに葉巻を吹かし、酒を飲み、「恥ずかしくて誰にも言えない秘密の話さ。だから普段は箱にしまって、この店に預けてる。その蓋を開けられるのは、この店でこうして飲んでる時だけだ」。

そしてA氏はさらにもう一度、至福の時を繰り返した後で。

「このご時世、記憶の箱を預けられる店を探す方が、ゴシップのネタを探すよりも遙かに難しいのさ」

タイミング良く鳴った氷の音は、ほんの少しだけわざとらしかった。

〈了〉